

雷丘の調査(飛鳥藤原第139次)

雷丘は甘樫丘から続く丘陵地帯の先端に位置し、飛鳥地域から藤原京一帯を一望できる高さ約20mの独立丘です。また、古代の幹線道路である阿倍山田道と飛鳥川が交わる交通の要衝に位置しています。『万葉集』に「大君は 神にし座せば 天雲の 雷の上に 廬せるかも」と詠まれた雷丘。今回の発掘は、この歴史上有名な雷丘を整備するための事前調査で、丘の上を発掘するのは今回が初めてです。調査は2005年の10月3日から始めました。発掘面積は約500㎡で、丘の上に十字のトレンチを入れて掘り進めています。

現在の雷丘は、中世(おそらく15世紀頃)に造られた城郭の姿をとどめたものであることがわかりました。その工事は大規模なもので、深さ約2mにおよぶ堀を丘の中央と東側に巡らせ、丘の上は平坦に削られました。中腹には武者走りや腰郭とみられる平坦面を削り出して造っています。この工事により古い時期の遺構は壊されたと考えられます。

また、周辺の調査で埴輪が多く出土していることから、雷丘が古墳である可能性も指摘されてきました。今回の調査でも西側斜面から多数の円筒埴輪の破片が出土しましたが、古墳と断定できる遺構はありませんでした。しかし、これらの埴輪は、雷丘の周辺の調査で出土しているものと似ていて、5世紀後半のものです。この時期は雄略天皇の時代ですから、『日本書紀』や『日本霊異記』にも登場する雷を捕えた伝承の時期とも合致します。調査が進むと、7世紀中頃から後半とみられる小型の石室が2基、見つかりました。古代の雷丘の変遷を考えるうえで重要な手がかりを得ることができました。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 神野 恵)



中世城郭の薬研堀